

シングル・タックスとフェミニズムと

——Hamlin Garland の *Main-Travelled Roads* について——

押 谷 善 一 郎

1890年3月、すでに創作活動に乗り出し始めていたハムリン・ガーランドに耳よりな話が舞い込んだ。時の進歩的雑誌「アリーナ」の編集者 B. O. フラウアーから、すでに雑誌に掲載済みの、中西部の農村を舞台にした短篇を集めて一冊の本にしてはどうか、という話であった。

自分の書いたものが本になるというのは創作活動をしている者すべての夢だが、そのような活動をしてまだ日の浅い24歳の青年ガーランドにとっても、それはご多分に洩れず大きな夢であり、目標であった。そのガーランドに上記のような話が舞い込んだのだ。彼が早速その仕事にとりかかったのは言うまでもない。彼は処女作となるその本を、「6篇のミシッピ川流域の物語」によって構成することを決め、すでに発表済みの4篇（「リップリーかあちゃんの里帰り」、「ライオンの爪にかかって」、「トウモロコシ畑の畝の間で」、「一兵士の帰還」）に、「分かれ道」と「クーリーの奥へ」の2篇を加え、『本街道』というタイトルをつけて、B. O. フラウアーに出版を一任した。こうして彼の数多い本の第一作が、1891年の春、ガーランド25歳のときに世に出たのである。

それぞれ独立した内容のこれらの6篇すべてに共通する図柄は、この処女作のタイトルとなっている本街道という言葉によって暗示されている。

作者ガーランドによれば、この言葉は、たとえば中西部のどこかで、ある農家へ行く道を尋ねると、「本街道をまっすぐ行って2番目の角を左に曲がりゃいい」といった具合に使われる、ごく一般的な言葉だったようである。

本街道とはいっても、きれいに舗装された道路などとはちがいで、「夏は暑くてほこりっぽく、春と秋はぬかるんでいて荒涼とした様相を呈し、冬は吹雪の舞う道」であった。もっとも、「ときにはいろいろな鳥の鳴き声が混じり合って聞こえてくる豊かな牧草地を横切っていることもある」が、「大体は延々とつづく、うんざりするような道」で、「通行する階層はいろいろだが、圧倒的に多いのは、貧しく疲れ果てた人びと」(113-114)⁽¹⁾であった。

作者ガーランドが処女作のタイトルとして、この本街道という言葉を使ったことは、したがって、この作品が、19世紀後半のアメリカ中西部農村地帯の「貧しく疲れ果てた人びと」の生活を描こうとした彼の意図を表わしている。

その意図どおり、『本街道』に収められた前掲のいずれの作品においても、農民たちの苛酷な労働と悲惨な生活が、細部を伴って仮借なく刻明に描かれている。『本街道』のどの部分をピックアップ

しても、それを例証するのに十分である。たとえば夏の労働の苦しさは、「トウモロコシ畑の畝の間で」の次の一節のなかに仮借なく描き込まれている。

ジュリア・ピーターズンは空腹で目がくらみそうになりながらも、弟のオットーが乗る汗びっしょりの馬に引かせた2枚シャベルの鋤の柄を握り、トウモロコシの畝の間を往き来しながら畑を耕していた。彼女の苦痛は限界に近づいていた。(中略)トウモロコシが両側から彼女を包み込み、そよとの風も彼女のところまでは届かないようだった。太陽は頭の真上に近づき、情容赦なく彼女の上に光を注いだ。(中略)足の下で埃が舞い上がり、汗でびっしょりの彼女の顔は真っ黒に汚れたが、彼女は女の本能で埃を払い、汚れを取った。頭が今にも割れそうにズキズキした。

(中略)馬は汗をポタポタ流し、鼻の穴を大きく開け、体を振るようにしながら黙々と辛抱よく前進するごとに、馬具がキーキーという音を立てた。(115-116)

ノルウェイからの移民の娘ジュリアにとっての夢は、このような辛い生活から抜け出して、「妻に百姓仕事などはさせない(中略)アメリカ人の男と世帯をもって、町に住み、そこで商売でも始める」(115-116)ことだったが、彼女の労働力を当てにしている彼女の父が、その夢を実現させてくれるはずはなかった。彼女は町の娘が教養娯楽をたのしんでいるときも、焼けつく大地を相手に闘わねばならないのである。

そしてこのような過酷な労働が、年頃の娘のみならず、年端もいかない少年にさえ課せられていることは、「ライオンの爪にかかって」における9歳の少年が、陽の上がる前から、「凍てついた農場にとぼとぼと出てゆく」様子を描いた一節によって例証されている。その一節を読んだ読者は、必ずや、「衰れをもよおして、胸がキューンと痛くなる」(164)にちがいない。

当時の開拓農場においては、子供も重要な労働力であった。前掲の引用文に見られる娘ジュリアは、ノルウェイから新大陸アメリカの土地を求めてやって来た開拓移民の娘である。

1862年の自営農地法は多くの人びとに農地を供給したが、文字どおり自らの労働力だけが頼りの開拓移民にとって、厳しい自然環境のもとでの労働は筆舌に尽し難いものであった。一家が総出で働いても、最低の生活をするのがやっとであり、少しでも異常気象に見舞われでもすれば、せっかくの土地を手放さねばならないのであった。

手放されたそれらの土地を手に入れるのは、資金豊かな企業や目先の利く個人であった。彼らは手に入れた土地を高い賃貸料を取って貸すか、高い値段で転売をして利益を上げた。

一方、土地を手放さざるを得なかった農民は、小作人になるか、あるいは更に質の悪い土地に移るかするほかなかったのである。「実際のところ、わざわざこの地にやって来て入植したおれたちだって、なにも全くの阿呆というわけじゃねえ。おれたちだってどっさり知恵があらあ。おれがウォーパック郡を出たのも、面白半分からじゃない。(中略)しかし、あそこにやまず可能性というものがない。いい土地はべらぼうに高く、とても手が出ねえ。土地を借りようたって、地代が高く、おれのような者は去るより仕ようがなく、ここに来たってわけだ」(106-107)と嘆く農民の

言葉は、多くの開拓農民と土地投機を行う少数の企業・個人との関係を明瞭に示している。前者が窮乏するのに反比例して、後者は豊かになっていくのである。

土地を失った開拓農民にとって一番辛いのは、これまた別の農民が言うように、「糖蜜入りの器の中のハエみたいに一生この状態から抜け出せないこと」(87)であり、状況が彼らにとって良くなるどころか、ますます悪化の一途を辿るだろうということであった。

このような「糖蜜入りの器の中のハエ」のように、「抜け出せる見込みの全くない」彼らの状況がどのようにして作り出されるかを描いたのが、『本街道』の6篇のなかでも最も優れた短篇「ライオンの爪にかかって」である。

ハスキング一家は、もとはインディアナの北部に住んでいたのだが、その土地を手放さざるを得なくなり、新たな土地を求めてアイオアにやって来たのであった。が、そこには肥沃な土地がひろがっていたにもかかわらず、それらの土地はすでに土地投機の企業や個人の手落ち、使用されないまま横たわっていた。彼らは手に入れた土地を利用して何らかの生産活動をするということもなく、土地を投機の対象としてのみ扱い、転売によっていわば不労所得として高い利益を上げているのである。彼らが自分たちの土地に付ける値段は、ハスキングのような農民にはとても手が出ないのだ。やむなくハスキングは、「いい土地が空地のままずっとひろがってるってえのに、わざわざそこを横切って」(158)、不毛の「乾いた大草原」の地、カンザスくんだりまで流れて行かねばならなかったのである。そしてカンザスに辿りついたハスキングは、その地で必死の努力をして一家を支えるが、結局は4年つづいて大発生したイナゴにすべてを食いつくされて、⁽²⁾ 営々と耕し養ってきた土地を失い、以前辿った道を逆戻りする。アイオアまで戻ってきた彼とその一家は、たまたまその地で親切な農夫カウンスルの家に寄寓させてもらうことになったというのが、物語の前段である。

ハスキングはカウンスルの助言を得て、地主のバトラーから、1年間の借地料250ドル、3年後には2,500ドルでその農地を売ってもらうという条件で農地を借りる。

3年後には自分たちの土地に出来ることを夢見て、妻はもちろんのこと、9歳の子供まで駆り出しての、まさに血と汗の3年間を過ごす。その間ハスキングは農場に柵を作り、自分たちの家を建て、井戸を掘り...といった具合に、その土地に多くの金と労力を注ぎ込む。そしていよいよ約束の3年が経った。

が、ハスキングは、地主のバトラーから、全く予想だにできなかった言葉を聞かされるのである。土地の価値が3年前にくらべて2倍に上がったから、5,500ドルで買い取るか、年500ドルの地代で小作をつづけるか、そのいずれかを選択せよ、というのだ。

ハスキングは、土地の価値を2倍にしたのはこのおれの努力と金だ、と激しく抗議する。しかしバトラーは、ハスキングのそのような抗議に耳を貸そうとはしない。それどころか最後に、「こうなりや、[年500ドルの地代で] これまでどうり続けていくか、それとも1,000ドルは現金、残り[4,500ドル]は1割の利子で、土地を抵当に入れて買い取るかのどっちかだな」(168)と冷たく言い放つ。

思わずかっとなって熊手をつかみ、バトラーを打ち殺さんばかりのハスキングの目に入ったのは、

前庭をよちよち歩きで横切る2歳のわが子の姿であった。「バトラーは大あわてで後ずさりし、... 一目散に逃げていった。あとには、陽光を浴びた小麦の束に黙ってしゃがみこみ、がっくりうなだれた頭を両手でかかえこんでいるハスキングの姿があった」(170) というのが、この作品の締めくくりの文章である。

読者はこの結末に描かれた農民ハスキングの姿を思い浮かべるとき、自営農民だけから成る農業共和国の建設というジェファースンの夢がもろくも崩れ去ったことを改めて認識し、出口のない当時の開拓農民の悲劇を痛感させられるばかりではなく、「土地投機こそ金儲けの一番確実な方法だ」(160) と信じるバトラーに対して激しい怒りを覚えるのである。

もっとも、作者ガーランドの怒りはバトラー個人に向けられているというよりは、むしろバトラーのような土地投機家の跋扈を許す土地制度に向けられているのである。そのことは、ハスキングの猛烈な抗議に対して、「あんた、未だくちばしが黄色いぜ。(中略) 法律じゃ そうはなつてねえんだよ」(169, 下点筆者) とバトラーに言わせていることから明らかであろう。

ここに読み取れるのは、本来公共の所有物ともいべき土地を、投機の対象として一部の資金豊かな個人や企業が次から次へと買い占め、そこから莫大な利益を上げることを許している土地制度に対する作者ガーランドの批判である。

この批判が、ヘンリー・ジョージのシングル・タックス(土地単一課税)に対するガーランドの共鳴から来ていることは言うまでもない。すでにサウス・ダコタの開拓者時代(1884年、ガーランド24歳の頃)に、ヘンリー・ジョージの主著『進歩と貧困』(*Progress and Poverty*, 1879)を読んで感銘を受けていたガーランドは、ボストンに出て来て3年後の1887年秋に、ジョージの講演を聴く機会を得たのであった。ジョージの主張の要点は、「地価への課税以外のすべての課税を廃止すること」であった。彼は言う――

われわれはすでに課税で若干の地代を徴収している。われわれはそれをすべて徴収するために、わが国の課税方法に若干の変更をすればよいだけである。

それゆえ、私が、賃金を高め、資本収益を増大し、受救貧民を根絶し、貧困を排除し、(中略) 犯罪を減少し、道徳と趣味と知識とを高め、政治を浄化し、文明をなお一層すばらしい高さにするような、簡単ではあるが最高の救済策として提案するのは――地代を課税によって専有すること――である。⁽³⁾ (下点訳者。原文では斜字体)

と。そして「地価への課税以外のすべての課税を廃止すること」を提唱したのである。

ヘンリー・ジョージの考えは、物質的進歩とともに土地の値段が上がり、その結果、土地を専有する少数の者たちが一般労働者や農民の思いもつかぬほどの利益を土地から得ることになり、それがひいては土地投機を惹き起こす。そしてそれは土地の専有を更に強め、弱い農民を虐げるばかりではなく、土地を所有しない一般企業の経済活動をも阻害し、景気の後退・不景気を招来し、一般の人びとを貧困におとしめる、ということであった。ガーランドは、この社会改良家ヘンリー・

ジョージの愛他主義、弱者への心からなる同情、そして社会の不公平に対する怒りにつよく印象づけられ、この講演を聴いたあと早速、劇『車輪の下で』(*Under the Wheel*) (1890年。2年後に小説化されて『ジェイスン・エドワーズ』<*Jason Edwards*>と改題)に取りかかった。彼はこの劇の序文のなかで、社会的公平と正義を回復する手がかりとしてヘンリー・ジョージの土地単一課税こそ最も有効である旨を述べ、⁽⁴⁾ 自分のこの作品がジョージのその理論のいわばプロパガンダとして意図されていることを示唆したのである。そしてこの執筆意図が、『車輪の下で』とほぼ同じ時期に書かれた「ライオンの爪にかかって」をも貫いているであろうことは、当然予想されることである。

しかし、前者が露骨な土地単一課税論のプロパガンダそのものといっても過言ではないのに対し、後者の「ライオンの爪にかかって」はハウエルズが評した「経済学の講義」⁽⁵⁾であることは否定しがたいが、その描写手法は抑制を利かせた叙述を特徴とし、そのことによって、いわゆる社会改良家としてのハムリン・ガーランドが前面に出ることを免れさせている。彼がハウエルズから学んだという「小説は教訓を垂れるべきではなく、例示すべきなのだ」⁽⁶⁾ということが、忠実に守られているのである。

また登場人物にしても、画一的なパターンにはめ込まれた前者の登場人物たちとはちがって、後者ではそれぞれ生きた人間としての実在性が与えられている。たとえば、読者の憎しみの対象となる土地投機家バトラーにしても、もとはしがない食料品屋だったのが、たまたま所有していた土地を「買い値の4倍の値段で売った」(159)のがきっかけで、土地投機に乗り出して財を成していったことがきっちり書き込まれているし、そのバトラーの「爪にかかる」ハスキンズ一家についても、前述のように、この地に流れて来なければならなかった必然性が要を得て簡潔に語られるのである。そして何よりも、土と苦闘する主人公の姿がいっさい描かれなかった『ジェイスン・エドワーズ』とはちがって、「ライオンの爪にかかって」にあつては、ハスキンズ一家の、そしてその一家を助けるカウンスル一家の、土に生きる生活が生き生きと読者の前に呈示され、それが作品にリアリティーを与え、そのことによってテーマの説得性が高められている。さらにまた、『ジェイスン・エドワーズ』におけるように、中心テーマの収斂がしばしばサブ・プロットによって阻害されるようなこともなく、開拓農民の生活の厳しさと悲惨さ、ひいてはその背後にある土地問題の不公平という、いわば短篇小説に必須の「単一の効果」が鮮明に浮かび上がるように工夫されているのである。

『本街道』を構成する6篇はそれぞれ、19世紀後半のアメリカ開拓農民の悲劇と、一部の個人や企業による土地専有という問題を、ヘンリー・ジョージの提唱する土地単一課税に対する作者ガーランドの共感を基にして描いたものであるが、その共感が最も簡潔に、しかも十分な効果をもって描かれたのが、この「ライオンの爪にかかって」なのである。

そしてこの作品の3倍ほどの長さをもちながら、それでいて構成の緊密性と主題の明確さにおいて優るとも劣らないのが「クーリーの奥へ」である。

ハワードは東部で成功を収めた劇作家兼俳優である。彼は今、10年振りて故郷、中西部の農場に一時帰郷するところなのである。

農場には母と弟のグラント夫婦が住んでいるはずだ。が、ハワードが故郷の地に戻って知ったのは、グラントが農場の抵当の利子を支払えず、やむなくその農場を人手に渡し、さらに奥地の農場に移って、苦しい生活を送っているという事実であった。

ハワードは、自分が東部で豊かな生活を満喫している間、母と弟夫婦は辛酸の日々を送っていたことを思い知らされたのだ。弟は手紙で援助を頼んできたというのだが、ちょうどその頃、ハワードは演劇仲間たちと旅行に出かけていてその手紙を受け取っていなかったのである。しかし、それは、当然のことながら、援助を拒否したと弟グラントに受け取られていたのだ。いかに弁明しようとも、この10年間、母を弟に任せっきりにし、しかも彼らの生活を省みなかったことは事実なのだ。ハワードは心から弟に詫びを述べ、遅まきながら援助を申し出るのだが、グラントは、「... この年齢じゃ新しいスタートというわけにはいかん。おれは完全な落伍者だ。おれたちの99パーセントの者は人生の失敗者さ。おれを助けるなんて、できない相談だ。時すでに遅しだ！」(101)と言って、兄ハワードの申し出を拒否する。こうして二人の関係が完全な修復に至らぬことを暗示して物語は終るのである。

ここに描かれているのは、当然のことながら、単にハワードとグラントという二人の兄弟の対立といった個人的レベルの問題ではなく、ハワードがたっぷりと満喫してきた東部の都市文明と、グラントがその中で呻吟してきた中西部の農業社会との対比、さらに言えば東部の資本主義経済と、ジェファースンの理想とした農本主義との対比である。具体的には、今の場合、資本主義経済の象徴的存在としての土地投機家と農業共和国の一員たる農民との対比であり、前者によって後者が崩壊させられてゆく姿の呈示である。

とすれば、これはそのまま「ライオンの爪にかかって」におけるハスキングズとバトラーとの関係でもある。弟グラントが手放さざるを得なかった土地は、抵当権設定者の手に落ち、「とてつもない条件で」売りに出されるか、または借地にされるのである。その結果、グラントのような農民は、「他のやつのために糞の中で這いずり回る」(87)ような生活を強いられるのだ。作者ガーランドの主張が、このような土地制度の不正・不公平の一端にあることは明らかであろう。

× × ×

さて『本街道』のテーマの一つが、今述べたように19世紀後半の土地問題とそこに示唆される土地単一課税だとすれば、もう一つの、無視されがちだが、同様に重要なテーマは、いわゆるフェミニズムである。ガーランドは、当時としては極めて新しいこの問題に関心を示し、この処女作のなかで新しい女性像へのアプローチを試みようとしているのである。

新しい女性像が最も顕著なかたちで呈示されているのは、「トウモロコシの畝の間で」と「分かれ道」の二篇においてである。

まず前者のノルウェイからの移民の娘ジュリアは、開拓農民ロブの求婚を最終的に受け入れ、彼女を無報酬の労働力としか見ない親を棄てて彼と駈け落ちするのである。

ロブは自営農地法に基づく農地を手に入れ、懸命の努力の結果、なんとか生活の目途が立ち始めた開拓農民である。彼は「他の人間の労働を食い物にしているやつらより、おれの方がよっぽど善

良だ。このおれ様の手で稼ぎ出さなかった金はビター一文たりともないんだからな」(107)と述べ、一部の特権階級が多数の人間を搾取してぬくぬくとしている社会を批判する、意識の高い農民なのだ。が、彼の今の悩みは、自分のパートナーとなって精神的な支えとなってくれる妻が見つからないことなのである。

“I wish that some kind-hearted girl
Would pity on me take,
And extricate me from the mess I'm in.
The angel —— how I'd bless her,
If this her home she'd make,
In my little old sod shanty on the plain.” (109)

「誰か優しい娘っこ、
おいらに情けをかけてくれ、
優しいその手を貸してくれ。
大草原のおいらの小屋を、
お前の住み家にしてくれりゃ、
お前を天使と崇めよう」

と口ずさむロブの歌は、単に彼一人の願いを歌ったものではなく、独身の開拓農民共通の気持ちを表わしたものであった。だからロブが故郷に嫁さがしに出かけると聞いた他の連中は、羨しがって彼を冷やかすのである。

彼らのからかいを逃れるようにして、生れ故郷に着いたロブがたまたま出会ったのは、学校時代の同級生ジュリアであった。ロブは彼女が他の若い娘たちのように文化活動などに参加することも許されず、ただ「安い労働力」として過酷な農作業に従事させられていることを聞かされる。彼女の両親としても、出来ることなら娘にそのような労働をさせたくはないのだろうが、ノルウェイからの開拓移民者の彼らとしては、娘をも労働力としなければ生活が成り立たないのだ。

一方、娘のジュリアとしては将来の展望が全くないことに絶望していた。だから昔馴染のロブと再会し、徐々に打ちとけてきたとき、その絶望感を口にしたのである。ロブはそのとき急に彼女との結婚を決意し、突然の求婚をしてジュリアを驚かせる。彼女は両親や弟のことを心配して断りつづけるのだが、彼の熱心な求愛に徐々に心を開いていくのである。

彼女はまた黙ったままだったが、彼の飾り気のない熱意が彼女に伝わってきた。彼女は、その厳しい生活のなかでほとんど味わったこともない、情熱とロマンスといったものに包まれていた。西へ行くことに何か心をそそるものがあった。(125)

ここまでくれば、もともと「学校時代からロブのことが好きだった」ジュリアが彼の求愛を受け入れるのに時間はかからない。彼女に明るい将来の展望を熱っぽく語り、「独立と愛」を約束するロブに、彼女は自分の人生を賭けることを決意する。こうして、その夜、彼女は家の者たちが寝静まった後、ロブの待つ約束の場所へ急ぐのである。

この作品がせっかく開拓移民のきびしい生活と、いわゆる農村の嫁不足という切実な問題を取り上げながら、極めて通俗的なセンチメンタリズムに墮していると評さざるを得ないのは、ロブが結婚の決意に至るまでの、そしてジュリアがそれを受け入れるまでの心理的な過程がほとんど描かれていないことに最大の原因がある。ロブの決意の余りの唐突さがプロットの不自然さを生み、それが通俗小説のそれと見まごうほどの結末の甘さに通じているのである。作者ガーランドが、親や夫に盲目的に従ってきた従来的女性像を否定し、自らの道を自らの意志で決定する新しい女性像の創造を急ぐあまり、二人が結婚を決意するまでの心の動きに意を用いることを怠った、ということではなかったか。

主人公の行動が余りにも直情的で、それ故に説得性に欠け、プロットの不自然さを生み出しているのは、もう一つの「分かれ道」も同様である。

ウィルとアグネスは町の同じセミナリーに通っており、相思相愛の間柄である。彼女の家の脱穀の日、近隣の人びとが手伝いにやってくるが、そこにウィルのライバルであるエドもやってくる。(この脱穀作業の生き生きとした描写は、当時の農村の作業風景を伝えて余すところがない)。アグネスを独占しておきたいウィルは、彼女が誰に対しても愛想よく振舞うことが気に入らない。恋するウィルには彼女の純朴な人の良さが理解できないのだ。

この二人の恋に不運が襲ったのは、それから間もない「郡カウンティの市フェア」の日であった。アグネスを迎えに行くウィルの馬車の車輪が外れて、ウィルは彼女との約束の時間に遅れてしまうのだ。それとは知らぬ彼女は、待てども来ないウィルが先日の脱穀の日彼女に腹を立てていたことを思い出し、迎えに来てくれないのだと考えて、誘われるままにエドの馬車に乗って出かけてしまう。それと知ったウィルは、彼女に呪いの手紙を残して西部へ去るのである。

7年後、一定の成功を収めて故郷に戻ってきたウィルは、「多くの農民が大農家と家畜業者に取って代られた」(24)様子を目の当たりにし、今さらながら中西部の変化の早さと大きさに驚くとともに、アグネスの身にも大きな変化が生じていることに驚きと責任を感じるのである。彼女はエドの妻となっているのだが、エドとその両親にこき使われ、見るかげもないほどやつれているのだ。7年前の誤解もとけて、彼はこの地獄のような状態からアグネスを救い出すことが、自分の果たすべき義務だと痛感する。そして「もう一度やり直そう」と、彼女に7年目の結婚申込みをするのである。

当然のこのように断るアグネス。熱っぽく結婚を求めるウィル。「皆にどう言われるかしら」と周囲の眼を気にしはじめた彼女に、ウィルは「そんなこと、どうってことないさ。一寸刻みにされたってここに留まればってのがみんなの言い草だろうぜ。だけど君はもうたっぷり苦しんできたんだ。ここに留まって離婚すりゃいい、って言うリベラルな連中もいるだろうけど、泥沼みたいな裁判に

引っ張り回された後、どうして離婚なんか出来ると思う？ 他の州に行きゃ離婚できるところがあるんだぜ。30歳でボロボロにならなきゃならんて法はないだろう？ おれたちの——いや、おれの若気の過ちを、生涯ずっと君に背負わせるなんて、おれには出来ないことだ」(46)と離婚の可能性を説き、自分との結婚に踏み切る勇気をアグネスに求める。徐々に彼女の気持ちがウィルとの新しい人生に傾きかける。と、そのとき、隣室で赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。彼女の気持ちが大きく揺らぐ。彼女は一児の母なのだ。しかしウィルはそれを当然のことと受けとめ、3人での新生活を明るく語る。事ここに至って、アグネスは人生の再出発に踏み切るのである。

さて、アグネスが自分の家の脱穀を手伝いに来てくれた人びとに愛想よく振舞ったというだけで、彼女の恋人ウィルが腹を立て、さらに馬車の車輪が外れたという不運があったにせよ、約束の時間より大幅に遅れた自分のミスを棚に上げて、彼女にいっさい弁明の時を与えず、彼女に呪いの手紙を残して去ったウィルの行動が、余りに直情的で説得性に欠けていることは否定しがたいことである。そしてその彼がエドから彼女を救い出すナイトの役割を与えられるのも、名状しがたい不自然さである。登場人物も典型的で、いかにも作りものといった感を免れない。かてて加えて、最後のセンチメンタルなハッピー・エンディングは、人びとが集まって行う脱穀作業の生き生きした状景描写で始まるこの作品のリアリズム性を、大きく損ねている。恐らく、これまた、作者ガーランドが夫や家庭という束縛を断ち切る女性像を描くことに急な余り、状況設定としてのプロットの不自然さや安易さに目をつぶったことに起因するのだろう。

もっとも、新しい女性像の描写ということにかぎっていえば、アグネスは、先に取り上げた「トウモロコシ畑の畝の間で」におけるジュリアよりは、はるかにインパクトの強い女性像を与えている。ジュリアの場合は、後に残される家族の問題があるとはいえ、なんといっても独身の女性であり、自分の将来を自分で決めるということに法的・社会的には全く自由であるのに反し、この「分かれ道」のアグネスの場合は、子供までいる人妻なのだ。その点で彼女はイプセンのノラを再現する新しい女性像を呈している、と言えるだろう。彼女はいわばハムリン・ガーランドのノラなのである。

ただ、ここで急いで付け加えなければならないのは、ノラが近代的自我意識に目覚め、みずからの意志で子供まで棄てての離婚に踏み切るのに対し、ジュリアとアグネスの行動はあくまで受動的であって、ノラのような自我意識の上に立っての行動ではない、ということである。ノラにはこれからの人生をみずからの手で切り拓いていくであろうという能動性が与えられているのに反し、上記二人にはそのような自覚の上に立った積極性は与えられていない。あくまで夫のパートナーとしての枠組のなかに留まるのである。

しかし、ガーランドが創造したこの二人の女性が、男性への隷属からみずからを解放した新しい女性像の萌芽であることは否定しがたいことである。

では、このような新しい女性像へのガーランドの関心は一体どこから来たのであろうか。

まず考えられるのは、彼が中西部農民の子として、幼い頃から、夫に盲従しながら黙々と労苦に耐えていた母の姿を見つづけてきたという事実である。土とともに生きる開拓農民の妻の苛酷な生

活が、ボストンに出て都会の女性たちとの接触を重ねたガーランドの胸に、鮮烈な意識を伴って思い出されてきた。彼は母の労苦を思い、開拓農場に住む女性たちすべてに限りない同情をいただいた。政界の腐敗を描いた彼の初期の小説『官職の役得』(A Spoil of Office, 1892)のなかで、彼が主人公のブラッドレー・タルコットに、「ぼくは農村の妻たちに同情する。彼女たちは男の非人間性を恐ろしいまでに証明している。ぼくの胸は彼女たちのことを思うと、はりさけんばかりになるのだ」⁽⁷⁾と言わせているのも、また彼自身が後年(1922年)、『パイオニアの母』(A Pioneer Mother)と題して、苦勞の連続だった母の思い出の記を小さな本にまとめたのも、忍従の生活を強いられた母を見て育ったことによるのであろう。

つぎに考えられる理由としては、当時のアメリカ社会における女性の権利の目覚めということがある。19世紀後半のアメリカ文学におけるリアリズム及びナチュラリズムの詳細な研究書(*The Beginnings of Naturalism in American Fiction*, 1961)を著わしたアーネブリンクによれば、19世紀最後の20~30年間に、土地問題への農民の意識と女性の権利意識とが呼応し合い、徐々にではあるが女性の権利拡大の運動がひろがり始めていた。雑誌には結婚、離婚、女性の衣服改革、男女平等、参政権などの問題が取り上げられるようになった。⁽⁸⁾ガーランドの初期の作品をほとんど引き受けて出版していた「アリーナ」誌の編集長B. O. フラウワーは、1891年の同誌の論説として、「今や女性の時代の夜明けがやってきた。それは人類史上、かつてないほど高度な文明の確かな予言を示すものだ」⁽⁹⁾と論じた「女性の時代」(“The Era of Woman”)と題する論文を掲載した。時の進歩的雑誌の編集者の威勢のいい宣言をそのまま信ずることは出来ないにしても、この一節からだけでも当時の社会風潮の一端は伺い知ることが出来るわけで、当の編集者と親密な交友をもち、高い社会意識をもっていたガーランドが、そういう風潮に敏感に反応したのは当然のことであっただろう。

さて、第三の、恐らくは最も大きな理由として考えられるのは、ガーランドに及ぼしたイブセン劇の影響である。

1889年の10月30日、ガーランドは初めて『人形の家』を観たのであった。それまで彼はイブセンの劇をいくつか読んではいたのだが、セリフが気品に欠け、退屈で平板に思っていたのだ。⁽¹⁰⁾が、その日、上手な役者たちの演ずる『人形の家』を観て、セリフの裏にある作者イブセンの意図をはっきりと理解したのである。その日の観劇は彼にとって単に「楽しい実験以上の何か」であり、「偉大なノルウェイの劇作家イブセンの演劇手法の力と迫真性、および真実を啓示するもの」⁽¹¹⁾となったのである。

その日の午後、劇場を後にしたとき、ぼくはすっかり新しい演劇に転向していた。そして昨今のすべての転向者同様、ぼくは印象主義や^{ヴェリテイズム}真実主義について語ったり書いたりしてきたと同じように、イブセン主義について語ったり書いたりしはじめた。イブセン主義はぼくにとって、もう一つの主義主張となった。⁽¹²⁾

これは観劇を終えた後のガーランドの興奮ぶりを伝える文章である。彼のこの熱っぽい語り口のなかに、イプセン劇の彼に与えた影響の大きさを読み取ることが出来るであろう。

たとえ近代的自我に目覚めた上での意志行動ではないにしても、ともかくも暴君的な男性への隷属から脱する行動を取った二人の女性を描いたガーランドの頭には、夫の「人形」でありつつけることをきっぱりと拒否したノラの姿があったにちがいない。

そしてジュリアとアグネスというこれら二人の女性を創造した体験を踏まえ、彼はやがて、近代的自我意識をしっかりとつ女性像の創造に取りかかるのである。それが1895年の『ダッチャー農場の娘ローズ』(*Rose of Dutcher's Coolly*)の主人公ローズなのだが、彼女については稿を改めて論じなければならない。

注

- (1) *Main-Travelled Roads* (With Introduction by Thomas A. Bledsoe), (Holt, Rinehart & Winston, N. Y., 1967), の見開きに記されたガーランドの文章。以下、本文中のかっこ内の数字は、本書からの引用頁を表わす。
- (2) 「熊手の取っ手までも食いつくす」イナゴの貪欲さは、小作人のハスキングズを食い物にする土地投機家バトラーの貪欲さを予示するであろう。
- (3) ヘンリー・ジョージ『進歩と貧困』(山崎義三郎訳)(日本経済評論社, 1991), p. 301.
- (4) Cf. Donald Pizer, *Hamlin Garland's Early Work and Career* (New York, Russell & Russell, 1960), p. 82.
- (5) Jackson R. Bryer & Eugene Harding (eds.), *Hamlin Garland & the Critic: An Annotated Bibliography* (The Whitson Publishing Co., Troy, NY., 1973), p. 2.
- (6) *Roadside Meetings* (Macmillan, N. Y., 1930), p. 125.
- (7) *A Spoil of Office* (Johnson Reprint Corp., NY & London, 1969), p. 294.
- (8) Cf. Lars Ahnebrink, *The Beginnings of Naturalism in American Fiction* (New York, Russell & Russell, 1961), pp. 80-81.
- (9) *Ibid.*, p. 81.
- (10) Cf. *Roadside Meetings*, p. 65.
- (11) *Ibid.*, p. 65.
- (12) *Ibid.*, p. 65.

(1992年8月13日受理)

(おしたに ぜんいちろう 文学部教授)